

勤務先は皇居の真ん前、第一生命館15階である。机に座って振り替えれば、皇居と皇居を見通した向こう側に防衛庁が見える。真下には日比谷公園があり新緑が目眩しい。

第一生命に過ぎたる物が3つあると口の悪い連中が減らず口を叩く。その一つが本館6階にあるマッカーサーの執務室である。応接室(貴賓室)も概ね当時のままに残されている。戦後の第一生命を見続けてきた歴史の証人ともいえるべき存在である。

9. 11の米国同時多発テロ以前は見学希望の人にも公開していたようだが、今は特別な場合を除いては公開していない。



(マッカーサーの執務室:山下撮影)

マッカーサーと言っても今の若い人には馴染みがないのかもしれないが、言わずと知れた先の大戦に敗れた日本に、サングラスにコーンパイプ姿で飛行場に降り立った、敗戦後の日本の最高権力者であった連合軍最高司令官その人である。

第一生命館は昭和29年9月に接收され、昭和27年講和条約が発効するまでの6年10ヶ月にわたり連合軍総司令部(GHQ)が置かれた。マッカーサー記念室はマッカーサーに続くリッジウェイ大将、クラーク大将の歴代の総司令官が使用していたもので、当時のたたずまいを残したままで保存されている。

約16坪(約54㎡)の室内の内装は米国産の胡桃の木、扉は全て一枚板、床は檜、樫、桜、黒檀等の寄木細工で、英国チューダー王朝風のインテリアである。机の上のガラスを除く机、椅子、絨毯、床、天井、壁、スピーカー、2枚の水彩画は当時のままのものである。

マッカーサーが第一生命館を選定したのは、幾つか考えられる。東京の中心、お堀を挟んで皇居に面していた。近衛兵の練兵場であった皇居前広場を見下ろすことが出来た。以上の立地条件の良さに加えて第一生命館の堅牢さも重要な要因であったと思われる。

この堅牢さの追求は保険会社としての使命であったようだ。その経緯は次の通りである。当時の第一生命館は、現在の第一生命本館である。大正12年の関東大震災で消滅した警視庁跡の国有地が民間に払い下げられることになり、4区画のうち3区画を第一生命が入手し、該地に新社屋を建設することとなった。地質調査の結果地下20mあまりの深さにある岩盤に基礎をおかないと堅牢な建物が出来ないことが判明し、隣接するお濠からの浸水の恐れがあるとの警視庁の苦情もあって橋脚建設時の潜函工法をビル建設において始めて採用した。当時「日本一長いのは東京駅、高いのは国会議事堂、深いのは第一生命館」と謂われた地下4階、地上8階の第一生命館は昭和13年10月に完成した。保険会社にとって最も大事な契約書類、申込書や契約者原簿を地下4階に保管することとなった。この堅牢さの証明としては、日本軍の高射砲4門が社屋の屋上に据え付けられていた事からも伺えよう。最も、より堅牢にというのが軍の要求でもあったようである。

地下部分はGHQには接收されなかった。

マッカーサーが使用する以前は、社長室であったと謂われているが、実際は、陸軍に接収されていた。昭和18年帝国陸軍の東部軍管区司令部を6階、7階に、屋上には高射機関砲陣地が築かれ、地下にも幾つかの省庁の分室が陣取り、終戦間際には、重臣会議が6階で頻繁に開催されたという。

昭和27年返還されたが、営業開始に先立ち契約者や各界名士に公開したところ評判となり東京の名所となってしまった。此処に社長室を置いたのでは、とてもことではないが、仕事に差し支えるというので、元帥が使った部屋を其の儘にしておくことになった。

マッカーサー愛用の椅子は、皮が剥げて傷んでいるが、この椅子は接收時の社長が使用していたもので、元帥は麻の布を掛けていたので、殆ど傷まず、戦後多くの見学者が座ったために傷みが激しくなったようだ。

一説によれば、元帥の机の上には殆ど何も置かれていなかったとか。即断即決を旨とする元帥の真骨頂が表れていると謂うべきか。そこらが私の様な凡人と違う。本人には整頓ではなくとも整理されていると思うのだが、他人から見れば乱雑としか表現のしようがないとか。

マッカーサーが戦後の日本に及ぼした功罪については色々と評価が分かれてはいるが、日本を無力化し、分裂と混迷を齎そうとした狙いは間違いなく達成されていると言える。「東洋のスイスタレ」が国内の進歩的知識人のみならず、殆どの国民に与えた影響は計り知れないものがあり、戦後50年を経た今日においてもそれらを払拭し得たとは言えない。日本男子の不甲斐なさも教育の混迷もその根源を辿ればマッカーサーの日本改造に辿りつく。

連合軍による日本の占領統治はマッカーサーの政策上の問題を除けば大成功であったと考えられる。その米国がイラクの戦後統治では大苦戦である。この原因というか比較をするのも面白かろう。天皇制を残して日本政府を通じての間接統治をしたことが日本の民族性と相俟って素晴らしい成果を挙げたのであろう。その点が、イラクとの根本的な差異ではあろう。が、忘れてならないのは、前の大戦において日本が敢闘したことが米国をはじめとする連合国に日本は尊敬するに値する国であると認識せしめたことがあるのかも知れない。米国兵による虐待や米国に対する未だに止まぬ抵抗は、どうも米国の傲慢さに起因していると思えない。